

大庄屋文書から見た酒田の世相（十二）

須藤 良弘

酒田の内町組大庄屋・伊東家と米屋町組大庄屋・野附家の文書（酒田市立光丘文庫所蔵）からで、原文の句読点は筆者が付け加えている。

一、酒田湊と蝦夷地との交易

安政五年（一八五八）四月、「公義御役人箱館御奉行支配組頭河津三郎太郎殿」が箱館に勤務することになり、「今度、海岸見分、酒田湊取調」のため、新潟経由で酒田に止宿することになった。

庄内藩ではこの一行の来酒に氣を使ったようで、酒田町奉行・阿倍傳大夫に越後からの動靜を伝えている。さらに、御公儀役人通行の際の前例を調べ、「酒田御止宿之節、銀子三枚・鯛貳連・別段庄内織上下地弍端。酒田御家中之内、御使者被仰付。御下役江者金三百疋」など「御贈可被成」。吹浦の難所「三崎峠御荷物歩行夫持二而、殊之外難洪」として、「御荷物等ハ船廻二而」差し障りのないように準備している。酒田には一泊で、宿泊先は記録されていないが、

本間家であつたと思われる。酒田止宿の時、「酒田本間より同所江出店開キ度よし二茂、御聞及被成候」と、本間家から箱館への出店願いを河津が承諾している。本間家は津軽に出店を持つが、函館に出店を開いたかはわからない。

河津が酒田到着以前に庄内藩を通して、酒田湊の現状と蝦夷地との交易についての報告を求められ、問屋は次のように報告している（野附家文書『安政五年御用控』）。

「一、湊 浅深何百石迄之船、何艘程碇泊相成候哉 但、何向二而、何風きらひ候哉、箱館海上何里有之候哉」。湊にどのくらい大きな船が何艘停泊できるか。湊口はどちらの方向で、どんな風向きをきらうか。箱館まで海上何里か。

「此御答 酒田湊より最上・村山郡船町河岸迄川路六拾弍里程」、右船町より上者小川二而、酒田川船通相成不申候。浅深之儀者、当時六尺五寸位御座候得とも、時々相変候儀御座候、ゝ、海船川口之儀ハ千弍、三百石より百石以下大小取合、凡百七拾艘位碇滞船繋留罷成申候。 当湊ハ亥戌之方二向申候、海船入津滞船中者、牛羊之風難義仕候、松前・箱館迄海上里数百二、三拾里位、同所城下迄百弍拾里位、同向岸まで百拾里位御座候」。最上川舟運では船町川岸（現山形市）まで約六十二里、これより上流は小川で通れない。湊の深さは六尺五寸位だが、時々変わる。海船は千三百石積み以下百七十艘位停泊できる。湊口は北西向きで、停泊中の海船は南南西の風に難儀する。函館方面への里数などを答えている。

「一、蝦夷地産物 鯡・鮭・鰯・鮭、其外とも一ヶ年何程位、凡入津相成候哉 但、何品多分二売捌候哉、石数承知致度候 御答 松前産物多取捌候分ハ鯡二御座候、其外荷品別紙凡取調申上候」。蝦夷地からの取扱品についての質問に、松前のにしんが多いとし、その外の品目と数量は別紙に次のように報告している。なんであるかわからない物もあるが、ほつけ・松前くじらなども入っている。

「一、生鯡四拾七万四百弍拾疋位	一、早割千束位	一、身欠七百弍拾本位	一、外割千三百九拾束位
一、数之子百七拾五束位	一、塩引弍万三千六百九拾本位	一、秋味三万七千三百四拾本位	一、

筋子貳百七拾七樽位 一、棒鱈貳百五拾九束位 一、鱈干壹万七千九百四拾位 一、鰯五百拾束位 一、

塩鱈五万三千七百九拾本位 一、同鮓貳万六千貳百本位 一、心天艸貳本位 一、細若和布三千四百八拾

貫匁位 一、花新昆布貳千四百三拾把位 一、駄昆布六百四拾四九位 一、早前同四百九位 一、胴

結同五百四拾六九位 一、江差同百三拾三九位 一、サスカイ昆布貳百五拾把位 一、袋海苔八拾本位

一、松前鯨小壹樽位 一、魚粕貳百三拾樽位 一、同小貳拾六樽位

右ハ去巳年中松前産物取扱候分、凡取調如斯御座候以上 午四月 問屋」。

「一、箱館・松前・江差江是迄何品積送り候哉。但、凡石数何程二候哉。 此御答 積出し穀物、其外とも別紙

凡取調申上候」。酒田湊より北海道渡島半島南部の函館・松前・江差への積み出し物と数量の質問への答えは、次の別紙である。表は俵のこと。

「一、庄内米壹万貳百六拾表位 一、新庄米貳千八百三拾表位 一、最上米貳千貳百表位 一、白米

五千六百表位 一、縄四万八千八百五拾九位 一、酒九百四拾八樽位 右者去巳年中松前表江積下り候

分、取調如斯御座候以上 午四月 問屋」。

「一、蝦夷地産物取扱候問屋、何人程有之候哉、名前承知いたし度候 但、船方より口銭何程ツツ受用致し来候哉、外ニ濱役其外遺物有之候哉」。蝦夷地産物取扱問屋名と交易に要する経費などについての質問に対する「此御答」は次の別紙である。

の別紙である。

「藤屋傳之丞 本間長三郎 小山屋八右衛門 齊藤屋八三郎 小山屋三六 右之通松前産物、当時取扱候問

屋名前如斯御座候以上 午四月 問屋」。「船方より請取口銭、其外濱役壹匁歩八厘七毛五拂、並諸掛りとも

都合百両二付五両貳歩貳朱位罷成申候 右之通取調差上申候処如斯御座候以上 午四月 問屋」。商品の売買

で、船方より受取る手数料や商品に課せられる税金、雑費などは、取扱い荷物百両について約五両二歩二朱と答えている。

二、来航外国船への対処

十八世紀になると日本近海に外国船が出没する事が多くなり、幕府はその処置について度々指令を出している。十九世紀に入り文政八年（一八二五）に異国船打払令（無二念打払令）、天保十三年（一八四二）七月には打払令を止め、外国船への薪・水・食料を与える事を許可している。これらは庄内藩へも幕府から通達され、酒田へも直ちに伝えられている（伊東家文書『御用帳 天保十二年、十三年』）。

「異国船渡来之節、取斗方之儀、此度御改正之御趣意を以、被仰出候処、警衛向之義ハ弥嚴重ニいたし、人数並武器之手當等、是迄よりハ一段手厚く可相心得旨相達候、右二付海岸防禦之面々ハ、向後備之人数相増、手當可申付置候、尤人数何人程相増候哉の趣立、是迄之備之人数を始、兼而用意申付置候鉄炮・石火矢等之員数迄、銘々委敷書出シ可申候、唯今迄備向手薄ニ而、事済候分も、若取かさり候而、書出候儀坏有之候而ハ、其詮も無之候間、聊不取包、有体ニ相認差出可申候、仮令、手薄之處有之候而も、別段御沙汰之筋ハ有之間敷候間、是等之趣心得違無之様可致候」。

外国船渡来時の取り計らい方が改正となった。しかし海岸の警備は一層嚴重にすること。警備の人数や武器の手当はさらに強化すること。海岸防備の役人はこれまでの人数や武器を調べ、さらにこれから増加すべき人員や武器をくわしく報告すること。今までの警備が不十分であつても仕方がないことで、罰することはしないので、実情を正直に報告することを求めている。次いで、

「一、海岸之國々津々浦々江、前々より異国船漂着いたし候哉、又ハ沖合等ニ相見候儀留記有之分ハ、不殘相糺書出可申候、もつとも前名已下並寺社領迄も右同様其筋へ可申立候、且又海岸之繪圖委細取調、並淺深も相量り、船附之場所より城下・陣屋迄之里数、或ハ兼而人数差出置候臺場・遠見番所之類迄認込、差出候様可致候 右之趣、前名已上已下共海邊ニ領分知行所有之面々、並寺社領まで不洩様可被相觸候」。

外国船が漂着した時や沖合に見えたりした時の記録を残らず調べ報告すること。海岸の絵図をくわしく調べ、海岸の深浅を計り、船着き場より城下・陣屋までの里数、前から人を派遣している台場・遠見番所のたぐいも記入して報告すること。これらの事を海岸に位置する藩や知行所、寺社領にもれずに伝えること。さらに続いて、

「觸出之趣、津々浦々迄早々相届候様取斗可申事

異國船渡来之節、無二念打拂可申旨、文政八年被仰出候、然ル處、

當時萬時御改正二付、享保・寛政之御改事二被復、何事ニよらず御仁政を被施度と難有思召二候、右二付而ハ、外國之者ニ而も逢難風ニ漂流等ニ而、食物・薪・水を乞迄ニ而渡来候を、其事情不相分ニ一圖ニ打拂候而者、前名江被對御處置ニも不思召候、依之文化三年異國船渡来之節取斗方儀ニ付、被仰出候趣ニ相復候様被仰出候間、異國船と見受候ハハ稔と様子相糺、食料・薪・水等乏しく、歸帆難成趣候ハハ、望之品相應ニ相与へ、歸帆可致旨申諭」。

文政八年に出された外国船への無二念打払令を止め、幕府の仁政により元にもどす。難風に逢い、漂流などして食物などを求めてきた外国船を理由もわからず、ただ打ち払いでは將軍や幕府の考えにもあわない。それで文化三年（一八〇六）の外国船渡来の時の取り計らいに復する。外国船を見たらしつかりと様子を聞きただし、食料などが不足して帰ることができないようであれば望みの品を与え、帰るように諭す。続いて、

「尤、上陸者為致間敷候、併此通被仰出候ニ付、海岸防禦之手當ゆるかせいたし置候杯心得違、又ハ猥ニ異國人ニ親ミ候儀等いたし間敷筋ニ付、警衛向之儀ハ弥嚴重ニいたし、人数並武器手當等之儀ハ是迄より一段手厚、聊ニ而も心弛ミ無之様心得可申候、若、異國船より海岸之様子をうかがひ、其場所人心之動靜ヲ試候為杯ニ鉄砲ヲ打懸候類、有之哉も難斗候へ共、夫等之事ニ動揺不致、渡来之事實能ニ相分、御憐恤之御主意貫キ候様、取斗可申候、左共、彼方より乱妨之始未有之候歟、望之品相与候而も帰帆不致、及異儀候ハハ、速打拂臨機之取斗ハ勿論之事ニ候、備向手當之義ハ猶追而相達候次第茂有之哉二候、文化三年相觸候趣留書ハ可有之候へ共、為心得別紙写相達候」。

しかし、上陸はさせない。海岸防御をゆるがせにしたり、外国人と親しくしない。海岸の警備を一層嚴重にし、外国

船が海岸の様子をうかがったり、動静を確かめるために鉄砲を打ちかけることがあるかも知れないが、その時に動揺することなく、渡来の事実をよく確かめ、幕府の情けある主意を貫くよう取り計らう事。先方より乱暴したり、望みの品を与えても帰らず、文句を言うようなことがあったら直ちに打ち払いなどの臨機の処置を取るのほち論の事である。防備については後で達することがあるかも知れないし、書き留めていると思うが文化三年のお触れを伝える。次が文化三年のお触れである。

「文化三寅年相觸候趣」

先達而おろしや船長崎江渡来いたし、用商等之儀相願候へ共、難取用筋二付、其旨申論、先年与へ置候信牌も取上之、已来乗渡間敷旨堅申渡、帰帆為致候二付再渡ハ致間敷候へ共、此後萬一漂流二事寄乗渡、何連之浦方ニ船繋中間敷ニも無之候間、異國船見請候ハハ早々手當いたし、人数等差配、先見分之者差出、次ニ様子相糺、弥おろしや船ニ無相違相聞候ハハ能々申論、成丈穩ニ可被取斗候、尤美ニ難風ニあひ漂流いたし候様子ニ而、食料・水・薪等乏ク、直ニ帰帆難相成次第二候ハハ、相應ニ其品与へ帰帆可為致候、且何程相願候共、決而上陸ハ不為致、帰帆迄ハ番船附置、見物等も相禁し、其段早々可有注進候、尤再應申候而も相拒、帰帆不致及異儀候ハハ、時宜ニ應し不及伺、打拂其旨可申聞候、右体之始末ニ到候節ハ、諸事寛政三亥年異國船之儀ニ付相觸候趣ニ准し取斗可申候 右之趣、前名已上之面々並其已下ニ而も、海邊ニ領分・知行所所有之面々江不洩様可被相觸候」。

以前にロシア船が長崎で通商を求めた際、これを断り、渡来も禁止したので再び来ることはないと思う。しかし、漂流にかこつけて海辺に船をつなぐことがあるかも知れないので、その時は早く処置し、見分の者を出して、様子を確かめる。本当にロシア船であるならなるだけ穏やかに取り計らい、実際に難破なら必要な品物を与え、帰させる。いくら願われても上陸させない。帰るまで番船を付け、見物も禁止。帰ることをいくらすすめても帰らず、異議を申し立てる場合は、指図を受けなくとも打ち払うよう。寛政三年（一七九一）の外国船に対するお触れに準ずるよう各方面に伝えること。

天保十四年十月、今までと異なり日本の廻船も太洋に乗り出し、朝鮮近くまで出かける船も出てきた。外国船と見間違っていることもあるので、三本帆を禁止していた。さらに遠い沖合を乗ることに外国船とにている帆の立て方を禁止する。違反した場合は必ず罰するという次の觸れが幕府より大目付に出された。これが酒田へも伝えられている。外国船渡来への緊迫感が益々強まってきた。ペルーの浦賀来航まで十年である。

「近年、北國筋其外諸國之廻船等異國之船ニ似寄候帆之立方相見、既ニ先而異國船と見違候次第も有之候、全三本帆之儀ハ難相成筋ニ候處、追々太洋を乗候様子已前トハ相違之趣、殊ニ寄朝鮮之地方近く乗懸候茂有之由、其外遠き沖合を乗候節、帆之立方異國船ニ似寄候得者、見違之義ニも至り可申哉、依之已来ハ異國船ニ紛ハしき帆之立方いたし並遠き沖合を乗候儀可為停止候、若、觸面之趣相背におひてハ吟味之上急度咎可申付候、右之通御料ハ御代官、私領ハ地頭より不洩様可觸知もの也」(伊東家文書『天保十四歳 御触帳』)。

三、酒田から最上新庄・米沢への商い

酒田から最上地方の新庄・大石田・米沢への送り出し品について寛延三年(一七五〇)の記録である(伊東家文書『寛延三歳 御用控帳』)。米沢への大網口の陸路のほかに、清川口では最上川舟運の船に同乗かとも思われるが、陸路もあったのであろうか。

「内町組伊兵衛と申者老人、最上新庄へ罷越申候間、上茶六本・着替共ニ、清川口罷通り申候様ニ御裏判可被下候、少も相違無御座候以上 午三月十六日 内町伊兵衛 肝煎九郎右衛門」。内町伊兵衛と肝煎から伊兵衛が新庄へ上茶六本と着替えを持って清川口を通る許可書への裏判を願っている。次ぎから清川口以下は同文なので省略する。

三月十七日、細肴町仁助と肝煎久三郎からくじら二駄についてである。「細肴町仁助と申者壱人、最上新庄へ商ニ罷越申候、鯨式駄・風呂敷包共ニ清川口罷通り」。三月二十六日、細肴町太次右衛門と肝煎から綿一本、「細肴町太次右衛門と申者、最上新庄へ商ニ罷出申候間、綿壱本・風呂敷共ニ清川口罷通り」。五月七日、細肴町多次右衛門と肝煎からしん三駄、「細肴町多次右衛門と申者壱人、鯨三駄・風呂敷包壱ツ共ニ最上新庄へ罷越申候間、清川口罷通り」。

五月十五日、内町利兵衛と肝煎市郎兵衛から利兵衛家内の伊七が大石田へ塩引三駄、「内町利兵衛内伊七と申者壱人、最上大石田江罷越申候間、塩引三駄共清川口罷通り」。五月十九日、細肴町吉蔵と肝煎から吉蔵せがれ吉太郎が新庄へしん四駄、「肴町吉蔵世倅吉太郎と申者壱人、最上新庄へ罷越申候間、鯨四駄・桶壱ツ・風呂敷包共ニ清川口」。

六月一日、内町与四右衛門と肝煎から与四右衛門家内の七之助が大網口より米沢にしん一駄、「内町与四右衛門内七之助と申者壱人、最上米沢へ罷出申候間、鯨一駄・風呂敷包共ニ大網口」。六月十七日、細肴町多次右衛門と肝煎から新庄へまぐろ三駄、「細肴町多次右衛門と申者壱人、鯨三駄・風呂敷包共ニ最上新庄江罷越申候間、清川口」。

四、世相あれこれ

イ、社寺の修復費を賄うために度々興行が催された。「酒田の世相 二」でも二番町にある愛宕堂での踊物まね興行について触れている。

次は享保十七年（一七三二）に日吉祠官斎藤山城守、内町組と米屋町組大庄屋斎藤半内・伊東傳内・池田吉兵衛・野附七郎左衛門から御町奉行所に出された晴天十四日間のかるわざ芝居興行の許可願である。浜田一丁目にある日枝神

社の屋根大破、外回りの柱が傷んだが、氏子が最近困窮して修復出来ないからとしている。

「乍恐以書附奉願候 拙者相守候亀ヶ崎御城内正一位日吉社之儀ハ、最上義光公より高拾七石八斗四升貳合之地方御寄附被成下、御墨印所持ニ付、〃、右日吉社之儀、武拾五年已前葺替仕候処ニ、近年屋根殊之外大破仕、其上外廻り柱等痛申候ニ付、葺替仕、外廻柱等茂修覆仕度奉存候得共、日吉之氏子近年別而困窮仕、右修覆成兼候、依之奉願候、今度日吉之社地ニ而かるわさ芝居相立申度奉存候、右寄錢ヲ以葺替建立仕度奉存候間、以御慈悲晴天十四日、来ル五月中被仰付被下置候ハハ、拙者儀者不及申、氏子之者迄難有仕合可奉存候、氏子頭以連判奉願候通被仰付被下置度奉願候以上 子五月」。

願いは酒田町奉行所と寺社御役所から許可され、興行収入十二両で葺き替えし、人足代は内町組と米屋町組で半々の負担である。「享保十七子年、元宮境内輕業芝居、晴天十四日奉願候通被仰付、歩錢金拾貳両ニ而葺替致シ、人足代内町米屋町半々出シ候、〃」。なお、祠官と大庄屋四人の「口上之覚」に「此度罷下申候小鷹十之助と申候かるわさ師」とある。(伊東家文書『御用帳』)。

口、寛延三年(一七五〇)、「外之町専助倅千松と申者忝人、最上新庄へ罷越申候間、澁紙包沓ツ共ニ清川口罷通申候様ニ御裏判可被下候、少も相違無御座候以上 午七月八日 外之町専助 肝煎幸助」、「右者内々不埒之儀有之、肝煎切ニ追放いたし候者」(伊東家文書『寛延三歳 御用控帳』)。

千松が新庄に追放の罪の内容は書かれていないが、「内々不埒」「肝煎切ニ追放」とあるから、表ざたにならない罪であったことから、肝煎にまかせられた追放と思われる。清川口通行の裏判を求めていることから、もちろん奉行所の内諾があつたのであろう。

ハ、最上川下流では古くから八ツ目うなぎや鮭などの川漁が盛んに行われ、税として役銀・御役鮭が酒田の御肴蔵に納めている。漁業権や漁場をめぐる争いも多かった。

次は明和三戌年（一七六六）七月、酒田桜小路（現日吉町二丁目）百助・肝煎權助と新井堀村半右衛門・肝煎勘太郎から、納屋小右衛門と獵師町（現船場町一丁目・日吉町二丁目）の者が預かっていた鮭漁を今迄より御役鮭を百五十尺（匹）増の三百四十八尺、外に今年一か年寸志金五十兩、獵師からは今迄通りの諸獵御役錢二十二貫を納めるので、今年より五か年間納屋にしてもらいたいという酒田御肴藏御役人への願いである。

「御役鮭上納仕候ニ付御請證文指上申事

一、水鮭百九拾八尺 去酉年迄納屋小右衛門上納高

一、同百五拾尺

当年より増御役上納

ノ三百四拾八尺

外ニ

一、金五拾兩

為寸志当年壹ヶ年御為金二指上申候

一、錢貳

拾貳貫 酒田獵師共諸獵御役口今迄之通り年々五月中御土藏江上納可仕候

右者唯今迄、納屋小右衛門並獵師町之

者共江御預ヶ被指置候鮭網引場、今度奉願、当年より増御役百五十尺、都合三百四拾八尺宛年々上納可仕候間、当年より寅年迄五ヶ年之間、拙者共へ納屋被仰付被下置度奉願候所、願之通被仰付、難有仕合ニ奉存候、右御役鮭御手間無御坐候様、年々酒田御肴藏江急度上納仕候、尤皆済不仕候内者、忝本成共取散中間敷候、為其御請證文如此御座候」。

百助・半右衛門は御役鮭を上納するまでは一本の鮭さえも外に取り散らかすようなことはしないとして納屋が許可された。台町（現日吉町二丁目）の市左衛門からも同様の願いが郡代所に出された。納屋に仰せ付けられるところであったが、御肴藏を管轄下に置く町奉行所を通さず、郡代所に直接出したことから不届きとして、町役人に市左衛門の口上書を取り上げさせ、慎みを命じられ、百助等が納屋となった。

「右之通百助・半右衛門より相願申候所、被仰付候、尤臺町市左衛門と申者、右同様ニ相願申候得共、不被仰付候、市左衛門此方へも相届ヶ不申、直ニ御郡代所へ相願申候ニ付、御奉行所ニ而も不届ニ思召候間、酒田町仲ヶ間を以市左衛門口上書取候、其後急度慎被仰付候、市左衛門所へ納屋被仰付候筈之所、御奉行所より郡代所へも右不埒之訳被仰遣候間、兩人へ被仰付候」。（野附家文書『明和三年 諸御用控帳』）。

二、酒田町組の総鎮守である下の日枝神社は安永二年（一七七三）寺町・大信寺境内からの火災で類焼した。本間四

郎三郎光丘が施主となり天明四年再建に着手、同八年（一七八八）に竣工、同年八月十三日に盛大な遷宮式が行われた。現在の社殿である（『飽海郡誌』）。次はこの時の遷宮についての詳細な記録の一部である。（野附家文書『天明八年 諸御用控帳』）。

「下の山王別当斎藤縫殿頭・不動院罷出候ハ、當十二日より十八日迄山王遷宮二付、御断申上候、」。そして遷宮の時に「祭礼之節之通乗馬」を「右馬乗之儀、両別當より申出候」とある。さらに「今度、下之山王遷宮二付、祭礼之節之通練もの指出呉候様ニ申出候、此儀者、本間四郎三郎殿より御内々御願申上候様」と、本間家から内々の願いで、遷宮の時の行列に、山王の祭礼時のように山車などの練り物を出させてもらいたいという願いが出された。「下之山王遷宮二付、酒田町ハ一町切二笠鉾等差出、賑候度相聞申候、右二付辻々ニも立札いたし候図左之通」で、「九月十二日より十八日マテ 鎮守山王宮正遷座 同月十三日御神輿渡御」の立札が町の角々に立てられた。

おみこし渡御の十三日の行列は、「笠鉾廿四出候由、其外中町より四天王共六人出候、獵師町弁才船出候、」、酒田町組の町々から笠鉾二十四など、内町組から「奴コ」など、米屋町組からは「幟、馬乗とも」。「龍巖寺（遷宮導師）かみしも二而出ル、縫殿頭もかみしも二而出ル、山伏大勢出、賑々敷事二候」。「本間四郎三郎殿」は馬脇など六人を従え、馬乗で出る。「巷ノ丁より七ノ丁迄角々江さやかけ俵積、青竹を立、まとみを付、中町ハ大工町角より臺町迄同様、寺町ハ近江屋次郎八より坂下迄同断」である。

ホ、天明八年、「九年以前盗米買取候不届二付、川南江追放申付」の「酒田八軒町番人長兵衛」、それに四年以前利右衛門小路の町医師と「及口論候不届二付、川南江追放」の同小路左衛門・仁左衛門から追放御免が願ひ出された。それで酒田町組大庄屋栗林、米屋町組同野附、町年寄から御町奉行所に「此度御免被仰付候而も、町内指障之筋無之候哉可申上旨被仰渡奉畏候、依之段々相尋候所、右三人之者共御免被仰付候而も、於町内差障候儀無御座候」が出された（野附家文書『天明八年 諸御用控帳』）。追放御免になっても町内には差し障りはないものである。